

※こちらの原稿は、中学生以上対象の課題です。

この枠で囲んでいる箇所がイラスト(さし絵)の課題場面です。

課題 1

表紙

① 遠くにいるおじいちゃんとおばあちゃんに会いに行くのを楽しみにしているきょうだいがいました。
「次に行く時は自分たちでおみやげを買って行ってあげよう」と二人は相談し、おじいちゃんの中から少しづつ貯金をしていました。

「どんなおみやげがいいかな...?」
「花たばはどうか? お花好きだもの」
「旅行の本もいいかもね。元気だったころは色々つれていってもらったね」
「おまんじゅうはどう? 甘いもの好きだよ」
二人はまよってしまつてなかなか決められませんでした。

② 二人はおみやげをさがしに出かけることにしました。
花屋さん、本屋さん、おまんじゅう屋さん...
あれこれ見ながらうしろを振り返ると小さなカワイイお店がありました。
入り口はお花でいっぱいでした。
「ふしぎなハチミツ屋さん」とかんばんが出ています。
二人はお店に入ってみることにしました。

③ お店の中にはハチミツがたくさんならんでいます。
大きいビン、小さいビン。
丸いビンに細長いビン。
色も少しづつちがっています。
「わあ、キレイだな...」
「でも、どこがふしぎなのだろう?」
二人はまじまじと見ましたがわかりません。
「いらっしゃいませ...」

声のする方を見るとお姉さんが立っていました。
ふんわりした上着を着て、黄色と黒のシマシマのスカートをはいています。
なんだかミツバチみたいだなと二人は思いました。

④ 「ふしぎをおさがしですか?」
お姉さんに声をかけられて二人はドキッとしました。
心の中が見られたような感じがしたからです。
お姉さんは、ハチミツのびんを一つ手の平にのせてくるりと回しました。
そして、ビンのうらの注意書きを読みはじめました。

1. ハチミツのビンは、フタを3回ノックしてから開けてください。
2. 目を閉じて、ハチミツのにおいをかいでください。
3. 目を開けて、ハチミツを食べましょう。
*そのまま食べても、パンに付けても、飲み物にしてもおいしいです。()

「なんだ、食べ方がめんどろなだけか...」
と二人はちよつとがっかりしました。
お姉さんは少しむつとして、
「めんどろなだけではありません... やってみれば分かります」とびしやりと言いました。それから、
「今はキャンペーン中なので、一つ買つても一つおまけがついてきます」
とにっこりしました。

課題 2

⑤ 「どうする?」

二人はお店のはじついで相談することにしました。
「おじいちゃんもおばあちゃんも甘い物が好きだから、きつとよろこぶよ」
「ハチミツはからだに良さそうだしね...」
「ためていたお金で一つなら買えそうだよ」
「...」

「よし!」
二人は目と目で合図をし、ハチミツを買うことに決めました。
「一つはおみやげにして、おまけの方は自分たちで食べてみようと考えました。」
二人はふしぎをためしたかったのです。
「ハチミツください!」
二人は声をそろえてお姉さんに言いました。
お姉さんは

「どれにしますか?」
とハチミツを指さしながら、
「れんげ、栗、あかしあ、クローバー、そば、とち、ローズマリー...」

と教えてくれましたが、いっぱいあって、迷ってしまい決まりません。
「なにか思い出のあるものがおすすです」
お姉さんは自信ありそうな顔をして言いました。

⑥ 二人はおじいちゃん、おばあちゃんに旅行につれて行ってもらった時に、美しいレンゲ畑があったことを思い出し、「レンゲみつ」に決めました。
「きつとよろこんでいただけますよ」
とお姉さんはにっこりしました。それから
「こちらはおまけです」
と言って「百花みつ」と書いてあるハチミツをくれました。

(⑥の続き)

二人は百花みつがなんのみつか分かりませんが、ありがたください、急いで店を出ました。
早くふしぎをためてみたかったのです。
二人はハチミツのびんをしっかりとにぎりしめ、かけ足で家に帰りました。

⑦ 家につくとさつそくおまけの百花みつでためてみることにしました。

ビンのうらの注意書きをもう一度読み返してみると、
1. ハチミツのビンは、フタを3回ノックしてから開けてください。
2. 目を閉じて、ハチミツのにおいをかいでください。
3. 目を開けて、ハチミツを食べましょう。
*そのまま食べても、パンに付けても、飲み物にしてもおいしいです。()

と書いてあります。
「あれ? ノックするってなんか変じゃない?」
「フタをたたく...じゃないのかな?」
二人はとりあえず、注意書きのとおりをやってみることにしました。
ドアをたたく時のように手をにぎってトン、トン、トンとノックし、フタを開けて、目を閉じて、ハチミツのにおいをかいでみました。
甘くて優しいともいにおいでした。
思わずもう一度、ゆつくりとおいをかいでしまいました。

⑧ すると、どうしたことでしょう。
目の前には一つと花畑が広がって見えたのです!
色とりどりの花々が競争するようにたくさん咲いています。
さわやかな風がふいて、お花が右に左にゆれる間をあちこちで小さなミツバチが元気にみつを集めています。
二人はうっとりしました。

⑨ しばらくしてそーっと目を開けるとそこはいつもの家のけしきでした。
「ねえ、なにか見えた?」
「見えた! 見えた! 花畑。色んな花がいっぱい咲いていたよ」
「百花みつって、色々な花みつのミックスなのかもね」
「ミツバチさんたちががんばっていたね!」
「フタを3回ノックするのは、ビンの中の世界に行きますよって合図なのかも?」

「きつとそうだよ」
二人はうなずきました。
そしていよいよハチミツを食べてみることにしました。
スプーンですくって口に入れると、とろりと優しい甘さが口いっぱいにひろがりました。
ふわりと花の香りもします。

ゆつくり飲み込むと、じわじわと力がわいてくるような感じがして、なんだかとても幸せな気持ちになるのです。
二人はこれならきつと、おじいちゃんとおばあちゃんがよくこんでくれるにちがいないと思いました。
そして、会いに行く日がますます楽しみになりました。

課題 3

⑩ いよいよおじいちゃんとおばあちゃんの家に行く日がやってきました。
ところが、久しぶりに会ったおじいちゃんとおばあちゃんは、あまり元気がありません。
二人はさつそくおみやげに持ってきたハチミツをわたして、うらの注意書きどおりにやってみるよつとすめました。
ドアをたたかうようにしてトン、トン、トンとノックしてフタを開け、目を閉じてからハチミツのにおいをかいで...
しばらくすると、おじいちゃんとおばあちゃんは泣き出してしまいました。
二人がはらはらして見守っているとおじいちゃんとおばあちゃんはゆつくりと目を開けて、
「きれいなレンゲ畑が見えた!」
「昔、元気なころに一人といっしょに旅行したことを思い出したよ」
「あの時、小さなミツバチたちが飛び回ってがんばっているのに感動したけど、今日も元気がももれた気分だ!」
となみだをふきながら話してくれました。
ハチミツをえらぶ時に、「なにか思い出のあるものがおすすです」とふしぎなハチミツ屋さんのお姉さんが言っていたことを思い出しました。

⑪ 二人はハチミツを食べてみるよつとすめました。
おじいちゃんとおばあちゃんは、ハチミツをスプーンですくって、口にのべたときとたんにつこり。

「なんだか、じわじわと力がわいてくるような感じがするよ」
「からだもころも元気になるよ!」
「すてきなおみやげをありがとう!」
と言って二人をだきしめました。
二人はおみやげをよろこんでもらえて、とてもうれしい気持ちになりました。

⑫ それから、おじいちゃんとおばあちゃんがハチミツソーダをつくってくれたので、みんなでかんばんいをしました。
それは世界一おいしい味がしました。
ふしぎなハチミツ屋さんみんなを幸せにしてくれるハチミツ屋さんといつことだったんだ...と二人は思いました。